

おいしいカツオで全国に「元氣」を届けたい

漁師の元氣を届けたい新聞 第3号

こんどは「米づくり」だ!

明神ファーム始動!!

ただちに欠かせない香り高い藁。おいしく水と空気の中で育ちます。



今年7月、青々と育った稲

▲山腹の棚田は、まるで空に浮かんでいるような気分。
◀農部隊、明神ファームの中心人物、山崎工場長。元は営業マン。広報から田植えまで、何でもこなす。

「明神水産のたたきと切っても切れないのが、『藁』。特有の良い香りが得られます。また適度に脂が身に馴染むことで、濃厚な味と食感が得られるのです。このたたきを焼くために必要なのが、根元で刈られた高い藁。状態のいい中空の藁は、瞬時に燃え上がり、八〇度もの高温になります。この藁を確保すべく出動するのが、明神水産の農部隊。」



農部隊は加工場の若手スタッフ为中心。毎年、稲刈りの時期になると契約農家さんを訪ね、藁を引き取りに行きます。一緒に藁を干したり、束ねる作業を手伝ったりしながら、トラックに藁を山積みして会社へ帰って来る。それが「農部隊」です。藁焼きたたきを作るのに必要な藁の量は一抱えもある大きな果が、年間で二万五千束以上。近年、ひろめ市場の明神丸など、明神水産の直営店でも「藁焼き」の人気がうなぎのほりて必要となる藁の量も増加する一方、農部隊の責任は重大です。



契約農家さんは、高知県内で約八〇件。水も空気もきれいな、山間部の農家さんが中心。平地では、コンパインで藁を碎いでしまおうと、長い藁が得られないことが多く、自然と山間部の農家さんが多くなります。この日、農部隊が伺ったのは仁淀川の支流、シロ工谷川に近い農家さん。仁淀川はそのきれいな水質による独特の色が「仁淀ブルー」と呼ばれ、一部では四万七千を凌ぐ透明度を誇る。その川を谷底近く、狭い山道をくねくねと進んだ先、南国高知といえ十月までストープが必要になるような、山の中の農家さんです。



「たたきのための、長く、状態のいい藁を作るのは大変で、乾かしていても風で倒れたり、台風が来るとシートで覆ったり、通常より手間がかかります。たなかの農家さんです。」

藁部隊出動!
高知の山間部の農家さんを探ね、藁を分けてもらいます。その数、180件以上!!



藁焼き
苦労して集めた藁。大切に扱って、美味しいたたきを作ります!!



藁灰を肥料に
藁の脂が染み込んだ藁灰は、良質な肥料になります。



米作り
明神水産は、良質な藁を確保するため、米づくりに取り組めます!!

藁が結ぶ、環境にもちょっと海と山のいいサイクル

農作業の現場を見て会話を交わす中で、若いスタッフの一人や物の接し方が変わってくると農部隊を指揮する山崎工場長は言います。「工場内での同僚の姿勢や会話もそうですし、稲を育てた人の顔見ても、その時の苦労話聞いて、だんだん、藁を無駄にしたらあかんと思えるようになる。藁を扱う手つきも変わってくる。そういう効果もあって、製造部の若いスタッフを積極的に農部隊に参加させること。」

しかし一方で農家の現状は厳しく、高齢化は深刻な問題。ほとんどの場合、後継者がなく「もう今年が最後かもわかって」といっ声か、毎年のように聞かれる状態でした。今年は大丈夫でも五年先、十年先はわからない。そんな中、数年前から「明神水産自身も米を作ることはできないだろうか」という議論が、西坂専務と山崎工場長の間で、幾度となく交わられるようになりました。そして去年、平成二十五年のある休耕田を見に行ったら西坂専務は、その水のきれいに驚き、「こんな水でお米作って、同じ水で炊いたら、ぜったいうまいやろ。」と確信。ここから明神ファームの発足が、具体化に向けて急加速することになります。

一服の「麗一本釣り漁船」から始まった明神水産が、今度は米づくりを手掛けることになったのです。

最初の挑戦は、荒れた休耕田を再生させたこと。スタート時のメンバーは山崎工場長以外三人。実家が農家だった小島以外、ほとんど農業は未経験。「びっくりしましたね、インシシが握りまくっててひどかったですよ。田んぼになるがやるかみたいな」とやたらと振り返るのは、入社二年目の宮本。その後、近隣の農業法人の方と知り会ったり、教えてもらったりしながら春の田植えを目指して、棚田再生に向けて奮闘してきました。

「ぜったい美味しいと思う。間違いないでしょう!」

西坂専務

ひろめ店から参加!

製造部から参加!

この辺は、インシシの方が多いわ。人間より。

製造部から参加!

休耕田の時の状態

製造部の宮本

田んぼに水張ったときは感動しました!

製造部の宮本

会社の行き帰りに、飛れた田んぼを見て寂しかったです。

近所の農家さん

水溜・森の滝

総務部から参加!

田んぼに「麗」

そうして五月、明神ファームの記念すべき初の田植えを迎えます。田植えは二日間、グループ各社から人員が集まり、総勢〇〇人以上。製造部専務、営業をはじめ、飲食店講師や漁船部、電算室からも人が集まり、グループ挙げてのイベントになりました。前日は、五月の観測史上最多を記録するといふ台風なみの大雨で、一時は中止も考えたそうですが、日が明けてみると見事な快晴。山腹の棚田はとて気持が良く、皆満面の笑顔で、にぎやかな田植えになりました。西坂専務は、「明神水産の商品は藁がないと始まりません。それを全員で知る機会にしたかった」とグループ大集合の意図を明らかに。漁師と農家の関係について、かつての思いを語っていました。「海のもの、山のもの、どっちが欠けても、もう藁焼きたたきという商品が成り立たない!」「漁師は一本氣、農家は我慢強い。気性は正反對だけど、美味しいいいもの届けたいという気持ちは一緒なんですよ。」

明神水産は、「明神ファーム」を新しい力として、これからより多くの接点で田植えを繋ぎ、互いに活かしていくことを目指します。海と山を通じて、それぞれが各部門に持ち帰りたい思いは、近い将来新しい商品やサービスとして、たかくさんの美に結実するまでです。そうご期待!